

はじまりの四十九日

斎藤航 二十二歳

(四月二十五日 深夜)

「眠れないねえ。女房が死んでから全然眠れない」

稲葉謙一郎(七七)が言った。彼の妻は一週間前に亡くなった。

「女房はね。この布団の上で亡くなったの。最期もおれが看取った。死ぬ間際はただ『ウー』唸っててね。水も飲まなかった。飲ませてでも吐き出すんだよ。腹がパンパンに膨れて、つらそうだったなあ。そのうち、うめき声がぜんぜん収まらない。おれは女房の手を握ってね『千代子、千代子だいじようぶだからな。謙はここにいる。ここにいるからな』って言ったの。あいつはね、おれの目をグツとのぞきこんでた。それからスーッと逝っちゃった。もう夜遅くだったよ」

謙一郎は自分の座っているせんべい布団をじっと見つめた。亡き妻千代子がそそうした跡が残っている。布団はまだ替えていない。

「ごめんね。暗いよね」と言って老人は立ち上がると、台所に明かりをつけに行った。時刻は夜十一時。私たちがいる四畳半に電灯はない。「もともとないよ。電話線も引かれてないからね」と謙一郎が言った。台所でパチリと音がした。四畳半にもわずかながら光が差し込む。老人はそのそと時間をかけて戻ってきた。畳の上でズズズと足を引きずる音が聞こえた。足が思うように上がらないようだ。妻の介護で悪くしたという腰は、痛々しく湾曲している。ひどい猫背だった。

「ここはね。お風呂ないの。だから一週間に一回銭湯に行くの。これは福祉から入浴券がもらえる。家賃？ 安いよお。四万四千元。でもね、いつもお金には苦労してるね。第一こいつがくせ者なんだ」

謙一郎は本日二箱目だというたばこに火をつけた。妻が亡くなってからは、たばこの量も増えた。「あんたはバカだねえ。たばこに銭が取られているのがわからないのかい。でも：：あんたは酒はやらないし。それまでとったらかわいそうだね」という千代子の言葉を謙一郎は忘れることができない。

二十三年前に二人は渋谷駅で出会った。謙一郎はベンチに座っていた。たばこを手し、大道芸を何とはなしに見ていた。そのとき彼は十六年連れ添った女を亡くしたばかりだった。死別から四十九日が経っていた。

彼は向こうのベンチを見た。自分と同じ年恰好の女が座っていて、同じように大道芸を見ていた。ふいに彼女が微笑んだ。自分に笑いかけている。そう思った謙一郎は笑顔を返す。すぐに女がやってきて隣に座った。お互いが話をしていくうちに、二人とも長年連れ添った伴侶を亡くしたことがわかった。話を終えて二人がベンチを立つと、いつしか大道芸は終わっていた。

「おれたちに行く場所はなかった。あいつは家を出払っていて、おれは宿無しだったからね。二人で深夜喫茶を渡り歩いたよ。このアパートに行き着いたのは十年前。死んだ女房の名前

で借りてるんだ。

暮らしは女房の生活保護のお金が頼りだった。一人分のお金で二人分まかってたんだけど。あいつが亡くなってからそれがないでしょ。今、新宿区の福祉に申請してるんだけど、返事、来ないねえ。返事に一週間くらいかかるって言ってたけど、ほら、これからゴールデンウィークでしょ。役所は休みなんだって」

水島千代子名義の預金通帳には、今年の十二月からひと月あたりおよそ十二万円が新宿区福祉事務所から振り込まれていた。今年の四月四日を最後に預け入れ金はない。四月四日は千代子が亡くなる十日前だ。謙一郎にとっては介護が最も大変な時期だった。彼はその日のうちに十一万円を引き出し、残高が七、六九四円になった。最後に引き出したのは妻が亡くなってから八日目の二十二日。七千円引き落とすと六九四円しか残らなかった。謙一郎は、千代子が残したなけなしのお金を引き落としたとき、自分がただただ情けなかった。

稲葉謙一郎と水島千代子。二人は国から認められた夫婦ではなかった。そのことを謙一郎が強く感じたのは千代子が亡くなった後だった。彼女が息絶えた後、謙一郎と一緒に救急車に乗った。亡骸は新宿区戸山にある国立国際医療研究センター病院に搬送された。病院に着くと「これから刑事さんが来ます。応答してもらえますか」と医者に言われた。死因が不明だったため警察で調査する必要があった。千代子は霊安室に安置されていた。謙一郎が彼女のそばに座っていると、戸塚署から刑事が二人来た。彼らは謙一郎を「おい君」と呼び寄せて、「奥さんの顔を拝めるのはこれで最後です。とつくとご覧になってください」と言った。その後、千代子の遺体は黒の自動車に乘せられて戸塚署へと送られた。それ以来、遺体はどうなったかは知らされていない。謙一郎の眼には霊安室で見た千代子の死に顔が焼きついて離れなかった。

「うちの女房、口をあんぐり開けて眠ってたよ。何かおれに向って言いたそうだったな。あやだやだ。女房の不安な顔なんか思い出したくねえよ。それにしても冷たいもんだねえ警察ってのは。二十三年連れ添った夫婦じゃないか」

時刻は十二時を回っていた。私が帰ろうとすると「どうせここにいっても眠れないから途中まで送っていく」と謙一郎が立ち上がった。私はまた訪ねようと思い、謙一郎にペンと紙を差し出して、ここの住所を書いてほしいと頼んだ。老人は顔の前で手を振って小さい声で何か言った。私は聞こえなかったのもう一度聞いた。

「おれ、読み書きができないの」

そう言う老人は、切り取ったチラシを差し出した。裏に住所が書いてあり、それを私に控えさせた。

「学校に行ってなかったからね」

（五月一日 夕）

ゴールデンウィークに私は再び稲葉謙一郎のもとを訪れた。彼はハサミを持ち、隣家の植

え込みを眺めていた。私は白髪の後ろ姿に声をかけたが、はじめ彼は私が誰だかわからなかったようで、しばらくの間、口をポカンと開け首をかしげていた。

「最近ボケてきてね。先日あつたばかりの人の顔も忘れちゃう。女房が亡くなってからだよこんなこと。もういやだね、一人残されると。」

何してるかって？ 今ね、花を採ってたの。女房の仏壇にあげる花ね。うちの女房花が好きでしょ。あいつが生きてるときね、隣の家のおさんが『氣に入ったの採っていいですよ』っていうからちよくちよくもらってたんの」

謙一郎はライラックに似た紫の花を選ぶと、空き瓶に活けて四疊半にある「仏壇」に飾った。謙一郎がこしらえた「仏壇」に仏像や位牌はない。百円ショップで買った黒い新聞ストッカーをひっくり返して台に仕立て、故人の思い出の品を並べただけだ。謙一郎が摘み取った花のほかに、ミッフィーちゃんのぬいぐるみ（日焼けで茶褐色になっている）・盆踊りのときのうちわ（浴衣姿の子供が描かれている）・たばこの臭い消しが、ちんまりと並べてあった。

私は謙一郎に一パックのいちごと柏餅を渡した。故人に供えた後、二人で食べるつもりで買ったものだった。いちごを渡すと謙一郎の手が小刻みに震えた。

「どうしました？」

「いちごはね、女房の好物だったの」

パックのいちごを「仏壇」に供えて拝んだ後、私たちはそれを下げて食べた。謙一郎は最も濃い色のいちごを四つ選んだ。それから「千代子、これお食べ」と言って故人に供えた。彼も自分が食べる分を四つ選び、「いただきます」と手を合わせた。前歯が欠けて上手に食べられないらしく、へたに赤い実が残っていた。食べ終わると、正座して両手を合わせ「ごちそうさま」と言った。

食後の頃を見計らって私は彼がなぜ読み書きができないのかを聞いた。謙一郎は少し考えてから、「空襲で焼け出されたあと家族がバラバラになってね。話せば長くなるよ。あんまりはつきりしないこともある」と言った。私はそれでもいいとうなずいた。謙一郎は先日のようにせんべい布団に座り直すと、たばこに火をつけた。

*

あの日は風が強かったね。どうしてわかるかって？ 火の粉が舞うんだよ。木造の家がパチパチ音を立てながら燃えてね、でかいたき火の中を逃げてみたいだった。

空襲警報が鳴ったのが夜の十二時過ぎ。家にあった防空壕にお袋と弟四人で潜った。大人が二、三人入るくらいの広さだったね。親父はおれが物心ついてたときにや戦争に行ってたよ。家にいる大人はお袋一人だった。

防空壕に入った後かい？　すぐ出たよ。というか出されたの。男の人がね、「防空壕の中にいると爆発で吹き飛ばされる」って大声言うから家族してあわてて出たの。その後すぐだよ。ボカーンで防空壕に爆弾が落つちたのは。数秒遅かったら・・・今ここにいないね。

後はねえ、もう必死。おれは六歳のガキだったけど泣いてなんかいらんない。家族を見失ってね。みんなはぐれたの。東池袋の家と巣鴨刑務所をね、ずうつと行ったり来たり行ったり来たり。何度繰り返したか覚えてないね。

あたりはどこもかしこも火の海。防空頭巾に火がついてね、ため池の水で消そうとするんだけど、水がお湯になってるの。水だと思って頭巾を池に浸そうとするんだけどアチツてすぐに手を引つ込めちゃう。手がただれるくらい熱いんだよ。お湯で火を消してかぶるんだけどね、すぐに蒸発して火がついて、またお湯で消すっていう繰り返し。

何で助かったかって？　たまたまと思えないね。夢中で逃げてたんだもの。ただね、逃げてるとね、人が集まるところとばらけているところができるの。安全そうなところに人がワツと集まる。不思議とね、爆弾とか焼夷弾っていうのは人が集まっているところに落つちるの。おれの周りにはあんまり人がいなかったね。小さい子どもらは親と一緒に固まって逃げてたから、焼夷弾や爆弾に巻き込まれてだいぶ死んじやったよ。おれみたいに一人で逃げてる子どもはね、ほかに見なかったね。

人が死ぬところ？　目の前で見たよ。おれが逃げてる方向の五メートル先に爆弾が落ちて、そんでおれの前を走ってる人が吹き飛ばされた。どこに吹っ飛んだかはわかんないね。空襲が終わって夜が明けた後がショックだったね。一番嫌だったのはにおい。人が焼けるにおいつてのは、もう臭いつてもんじゃないよ。それから「マグロ」がゴロゴロと横たわっててね。焼け死んだ人のことを「マグロ」って呼んだんだよ。「マグロ」はもう人として扱われないの。鉤の付いた竿にひっかけてずるずる引つ張って運ばれた。並べられた「マグロ」は手を強く握りしめていたり、手を目の前で広げて顔を守ろうとしていたり、もうまちまちの格好なの。ああやだやだ。思い出したくないねえ。やだやだ。

もつとつらかったのが戦争のあと。親父が死んでから家族とバラバラになった。親父が死んだのがおれが六歳か七歳のときだったね。列車から振り落とされたの。あの頃の列車は一日に一便しか出なかったから、そこに人間がぎゅうぎゅう詰めになって乗るの。車両はもちろん屋根の上まで人がいっぱい。信じられる？　東京に食べ物がなかったから田舎まで買い出しに行く人がたくさん乗ってたの。親父もその中の一人だったんだろうね。葬式はやつたかな。あんま覚えてないな。

その後だよ。家族がバラバラになったのは。おれのお袋がまた怖い人でねえ。子どもがなつくような女じゃねえんだ。生まれた時からずうつと言われてきたよ。おれと弟たちに向ってさあ「人様に迷惑かけるな！　お前らはお前らで勝手にやれ」って。別れるときもその言葉だけ。それ以来お袋がどうなったか、弟たちがどうなったかわかんないね。おれはずうつと一人だった。

その後、どうやって生きていたかって？　「浮浪児」やるしかないよ。もつと大きくなる

と住込み。こき使われてなあ。戦争の後は食いもんがないのが一番つらかった。思い出したくねえよ。今さら。

*

一通り話し終えると謙一郎は紙ナプキンで鼻をかんだ。マクドナルドから頂戴してくるらしく、ちやぶ台の上に束になって何十枚も置いてあった。謙一郎は口を開いた。

「ボケても昔のことは覚えてるもんだね。やな思い出には違いないのに」

「奥さんにはこの話を？」

「すると嫌がる」

謙一郎はあぐらをかいて座り直した。窓からは西日が差しこんでいた。外では近所の猫がエサを求めて鳴いている。私はそろそろ帰ると言った。老人は明日にまた新宿区の福祉事務所を訪ねるという。生活保護が受けられるかどうかを聞かためだ。

別れ際、救急車のサイレンが聞こえた。

「いやだね。救急車。女房死んだの思い出すよ」謙一郎が言った。

（五月三日 夕）

三連休の初日だった。私はメモを手にも早稲田からの路面電車に乗っていた。

東京都豊島区 東池袋四丁目 八七―一

謙一郎が役所に調べてもらったところによれば、それが彼の本籍地だという。空襲で焼かれた家がかつてあった場所だ。案外近い。が謙一郎はなかなか足が向かない。以前、私が「行ってみたら」と何気なく言ったことがある。すると、彼は「巣鴨刑務所、今は何とかサンシャインか。その近くにあったけど、行っても特になんも思わないよ。昔の面影なんて全然ないんだから」と言って拒絶した。

私は東池袋駅で降りた。サンシャインシティの近くなら駅から歩いてすぐのはずだ。だが、東池袋四丁目のあとの「八七」なる住居表示はいつこうに見当たらない。迷いに迷い私は交番に駆け込んだ。

「東池袋四丁目の住所は四二号までしかないよ」

若い警官は地図を見せながら、東池袋四丁目に「八七号」は存在しないことを私に丁寧に説明した。私が、謙一郎の差し出したメモを写し間違えたのかもしれない。暗がりでもメモしたのでその可能性がないとは言えなかった。役所が謙一郎のために書いたメモには、本当は「八―七―一」と書かれていたかもしれない。

「それじゃあ四丁目の八号はどこか教えてください」

「八はちようどの交番の裏だね。ビルがあるでしょ。そこらへんだよ」

「八の七、八の七」とつぶやきながら私はビルの辺りを捜した。だが目当ての住所にはいつこうにたどり着けない。ぐるりと一周して、とうとう交番の前に戻ってしまった。先ほどの警官がこちらをいぶかしげに見ている。ばつが悪くなって、私はとっさに細い通りに引っ込んだ。すると、あった。八〇代の番号が。

東京都豊島区 東池袋四丁目 八九―三

それは「建築計画のお知らせ」の看板に書いてあった「地番」であった。稲葉謙一郎の本籍地は地番で書いてあったのだ。私は看板を見た。十一階建てのビルがこれから建つという。建築主は「三菱UFJ信託銀行」、施工者は「大成建設」だ。一帯が建築作業のための擁壁に囲まれていて中は見えない。

私は辺りを散策した。ビルの建設予定地の周りには昔からの人々が住んでいる様子はない。祝日のせいかもしれないが、商店にはシャッターを下ろしているところが多かった。開いている店は夕方からやっている居酒屋くらいだ。謙一郎が言ったように本当に何の面影を見ることもできなかった。彼に私がここに来たことを話すべきかどうか。私は悩みながら人通りの少ない道を駅に向かって歩いた。駅に着くと、時を待たずに早稲田行きの路面電車が到着した。

「ああ、やつぱり斎藤さんか。今日は来ると思ってたよ」

三回ノックをすると老人がドアを開けた。白いひげが顎にうつすら生えている。二日の間に少しやつれたようだ。布団の上で座ったままうとうとしていたという。時計を見ると五時だった。

「そうそう。生活保護ね、決まったよ」

「よかったじゃないですか」

「うん」

「あんまりうれしそうじゃないですね」

「うん。一日がね、とても長く感じるの。それにすることなくて退屈なんだよ」

昨日、生活保護費の受給が決まったのだと謙一郎は話した。それと一緒に交通機関のフリーパスももらった。これを使えば都営の交通機関が無料になる。今日はそれを使用し、一日中、大江戸線に乗っていたという。老人は行くあてもなくぶらぶらとしていた。

「一日中家にいてもねえ。退屈だよ。テレビは女房が死んでからぶつ壊れちゃうし。新しく買う金もないし。」

あ、そうそう。死んだ女房のね。本籍がわかったの。福祉から連絡があつてね。あいつの本籍、糸魚川だって。新潟の。あとね。あいつ、自分の年ね、やつぱりサバ読んでたよ。ほんとはいくつだったと思う？ 八十五。おれより八つも上。生きてた時は『あたしは辰年だからあんたの一つ下ね』って言ってたんだよ。参っちゃうよ。おれよりも先に逝

つちまうわけだ」

謙一郎は身をかがめてクスクスと笑った。実は謙一郎、千代子が年齢を詐称していたことを知っていた。以前、彼が彼女の住民票を見ると昭和六年生まれと書いてあったのだ。

「おれはね『お前、年ごまかしてるね』なんて言わないよ。『辰年、ああ一つ下ね』って話を合わせるだけ。隠してたことはいじやない。よく八十五まで生きたと思って。がんばったよ」謙一郎は「仏壇」を眺めた。

「あいつは自分の過去を話さなかったね。話すのも聞くのも嫌がった。だから、おれも空襲にあったこととか浮浪児やっていたこととか昔のことは話さなかった。

おれは読み書きできないからね。触れちゃいけない事情があるとあいつは思ってたんじゃないかな。おれたちは戦争を経験してきたからね。何となくわかるんだよ。千代子、いつも言ってたよ『あたしたちはつらい昔のことは忘れてこれからを幸せに生きましよう』って」

私は今日池袋に行ったことを言わないことに決めた。何も知らない謙一郎は話を続ける。

「六月一日なんだけどさ、千代子の命日から数えて四十九日目なんだよね。それでね。何かあいつの好きなものを仏壇に供えて弔いをしたいと思ってるの」

「いいですね。夕方の六時以降なら僕も行けます」

「それじゃ、六時過ぎにしようか」

「千代子さんは何が好きでしたか」

「食べ物はいちごでしょ。あと日本酒。それから花とウサギと猫とね・・・」

私は話を聞きながら部屋にあった卓上カレンダーを見た。六月一日にグリグリと丸印がつけてあつて「千代子 49」と判別しにくい字で書いてある。四月十四日にも「千代子より 10:30」といれまた下手くそな字で書いてあつた。千代子は夜十時半頃に亡くなったと前に謙一郎が言っていたのを私は思い出した。

—それから約二週間後の夜

「よくここにいろのがわかったね」

謙一郎は驚いた様子で私を見た。それから椅子を引いて向かいに座るように促した。私は三日に一回の頻度で謙一郎のもとを訪ねるのが習慣になっていた。まずアパートに行く。いなかったら行きつけのマクドナルドに。そこにもいなかったら帰るというふうに決めていた。彼は電話を持たない（持てない）ので、会うためにはこちらが訪ねるしかなかった。

その日、私は老人をマクドナルドで見つけた。彼はコーヒー一杯と無料の氷水で深夜まで粘っていた。顔は以前よりもやつれ、ただでさえ窪みがちな目は、より一層落ち窪んでいた。私が見つけたときは壁にもたれかかって目をつむっていた。

「今ね、うとうとしてたの。家だとやっぱ眠れないんだ。女房が死んだところだから

さ。あの布団に横になるとさあ、あいつの死に顔が浮かんで寝付けられないんだよ。声が聞こえるようだね・・・眠れない」

「今日は伊勢丹にでも行ってきたんですか」

私は彼の傍らにある紙袋を指さして言った。

「いんや。これは銭湯に行くのに使ってる袋。この袋はねえ、伊勢丹で店の人にくださいつて言えどもらえるよ。女房が伊勢丹大好きでねえ。袋ならうちにいっぱいあるからあげようか」

謙一郎はいつものようにその日に起こったことを私に話した。どこへ行っても、どんな出来事に遭遇したとしても、彼は「一日長いね」や「退屈だね」と言って締めくくった。独りでいることに心底参っているようだ。千代子が存命中は、二人分の食事を用意したり、病床の彼女を介護したりして張り合いがあったが、今は家に帰っても誰もいない。仲の良い友人もみんな死んだ。食事も三食いただくと言うよりは、腹が減ったら口に入れるという意識に変わった。口が食べ物よりもたばこを欲し、悪いことに、そのたばこ代は食費よりもかさんだ。たばこ二箱で八八〇円が一日に消え去った。

深夜になったのでそろそろ帰ると私が切り出すと、謙一郎は途中まで送っていくと言い出した。たばこが切れたのでコンビニまで買いに行きたいという。

彼は小銭入れを出して中身を確認した。そして自嘲気味に笑った。

「どうしたんですか」

「情けないね」

「何が」

「たばこ代を計算して買うのが・・・情け・・・ない。昔は・・・こんなこと・・・なかった」

謙一郎がたばこを買い終わると、私たちはコンビニを出た。二人で並んで住宅街の狭い道路を歩いていると、後ろから乗用車が走ってきた。そのとき私は自転車を引いて道路の中央寄りを、謙一郎は端を歩いていた。私が「車が来ます」と注意を促すと、謙一郎が道路の中央に向かってそろそろと歩み出た。

「一思いに轢いてくれえ！」

車はかすりもせず老人の横を通り過ぎた。ブレーキも踏まなかったしクラクションも鳴らさなかった。老人の足がおぼつかないのが幸いした。

「なにやってるんですか」と私は言った。

「できれば・・・代わってやりたかった。さんざん介護させて、自分はぼっくり逝きやがって。置き土産に、腰の痛みだけ残してきやがって・・・千代子」

生前、水島千代子は稲葉謙一郎に事あるごとに言っていた。

「あんたが先死んだ方がいい。あたしが先死んだらあんたの行き場がない。そしたら、あたし、死んでも死にきれないよ」

(五月三十一日 夜)

私はまた三回ドアをノックした。ノックはこれで三度目になる。でも謙一郎は出ない。台所の明かりはとうとうと灯っている。「夜、明かりがついていたらおれはいるからね」。彼は確かにそう言っていた。

私は外から台所の窓を少し開けて中をのぞいた。謙一郎がいつも座っているせんべい布団が敷かれている位置は、壁に遮られて見えない。私は声をかけたが応答はなかった。ここにはいない、と私は思うことにした。たまたま電気をつけたまま外出したに違いない。一方で「できれば代わってやりたかった」「一思いに轢いてくれえ!」という彼の叫びが耳の奥でこだまする。私はその叫びを聞いてから一週間近く彼の顔を見ていなかった。

家にいなければ夜に行くところはあそこぐらいしか考えられなかった。私は階下に止めてあった自転車に飛び乗り、山の手通り沿いのマクドナルドに急いだ。

迷路のような住宅街の路地を走っていると目の前で何かがピクリと動いた。白と黒のまだらの猫だ。猛スピードで近づいてくる自転車に一瞬驚いたようだが、速度を緩めてからは、猫は微動だにしない。夜目にもわかるほど凜とした顔つきをしている。謙一郎のお気に入り猫だと私はすぐにわかった。

「白と黒のまだら模様の猫ね。これがまたいい顔つきのオス猫だね。母親に放っておかれた子猫の面倒をみる優しいやつなんだ。うちの近所には三匹野良がいるけどあいっただけだね。なついてくるのは。さっきもあいつがすり寄って来たからズボンが毛だらけになってさ。ズボンにブラシをかけなきゃならなかった」

以前謙一郎がそう話したのを私は思い出した。不平とは裏腹に目と口は笑っていた。

謙一郎は果たして例のマクドナルドにいるだろうか。そう思いながら、私は自転車から降り、チッチッチと鼠鳴きをして猫に手を近づけた。謙一郎は確かこうしていたはずだ。まだらの猫は、しばらく私の様子を観察すると、プイッと背を向け、近くの植え込みに逃げ込んだ。

謙一郎は二階の窓際の席にいた。外の通りから店内を見ると、彼と目があつた。私は自転車に乗ったまま手を振った。彼はちょうどハンバーガーを口にするとところで、驚いてむせているのが遠くからでもわかった。死んでなかった。そう思って私は店に入った。二階へ駆け上がると、階段の上り口まで彼が迎えに来ていた。

「やっぱ斎藤さんか。今日は来ると思ってたよ」

謙一郎の声はいつになく大きい。そこにいた客全員が私たちに目を向けた。謙一郎は気にも留めずに、そのままの大きさで続ける。

「席はこっち。お腹減ったでしょ。何か食べる？」

私は席に荷物を置くと、自分で買ってきたと言って一階のカウンターに降りた。二階へ戻ると謙一郎が席に座り、私に向かって手を振っていた。

「明日が千代子の四十九日だからね。絶対来ると思ってたよ」

「昨日か今日のうちに来ようと思っていました。実は昨日も家に行っただけです。明かりがついていたのにノックをしても返事がなくて。今日も明かりがあっても返事がないので死んだのかと思ってたんです」

「昨日来てたの。悪かったね。何時ごろ？」

「ちょうど今ぐらいの時間です」

謙一郎はシャツの左袖をまくって腕時計を見た。午後九時四〇分。右手首に数珠をつけているのが見えた。

「ごめんね。昨日はその時間は眠ってた。ほんのちよつとの間だけね、うとうと、うとうと、と。疲れが溜まってたんだね、きつと」

全然眠れない。以前、老人は会うたびにその言葉を口にしていた。

「よかったですね」とだけ私は言った。

謙一郎はこの一週間にあったことを私に話した。他の客は誰も話していない中で、狭い店内に、彼の大きな話し声は特徴ある話し方のせいもあってか異様に響いた。私たちが席に着くと隣にいた女性客が数分もしないうちに席を立った。

「今日ね。おれが外でたばこふかしてるとね。福祉の万木^{まき}さんが来たの。おれは明日の千代子の四十九日に関係してかな、と思ったけど違うみたいね。近所に身体の不自由な人が一人で住んでて何かよくないことがあったみたいだね。家財道具とか何やら持ち出していたよ」

「孤独死・ですかね。福祉が稲葉さんのところに来たのは稲葉さんの生死の確認のためだったりして。僕みたいに」

「わからない」

沈黙がしばし続いた。窓の外は雨が降りそうでどんよりと暗い。こうこうと光る店内の明かりに反射してガラス窓に私たち二人の姿が映し出された。

「稲葉さんは死ぬのは怖くないですか」

「おれねえ。千代子に拝むときいつもこう言って拝むんだよ『千代子、成仏しろよ。謙もすぐに行くからな。それまで待ってろよ』って」

「ポツクリ逝けるといいですね」

「うん。でもまだ死ねないよ。福祉の万木さんに千代子のお骨がどうなったか聞いたんだけどね、まだ返事が返ってこないんだよ。あいつが死んでどうなったのかがわかるまでは、落ち着いて暮らせないし、心残りで死ねないね」

謙一郎は新宿区福祉事務所に千代子の亡骸の行方を聞いた。それによると、水島千代子の本籍地、糸魚川には彼女の妹が住んでいるのだが、親類が高齢化し、葬儀や埋葬ができる余裕がないという。謙一郎が聞いたところによると、糸魚川の要望は、東京で葬ってほしいということだった。現時点ではそれ以上はわからないという。

国から認められていないとは言え、稲葉謙一郎は水島千代子の夫である。その夫は、一

カ月近く、亡き妻がどのような処置を受けたのかわからないままでいた。最も親しかったのにもかかわらず、法律の埒外に置かれた夫は、妻の亡骸から最も遠くに離されていた。明日が四十九日だというのに、遺骨が四疊半に戻って来なかったばかりかどこに埋葬されているのかもわからない。謙一郎は明日の四十九日を前にそれだけが心残りだった。

アパートを訪れると四十九日のために特設の「仏壇」がこしらえられていた。仏像と位牌こそないが、遺影と小さい香炉とおちよこが新しく供えられていた。とはいえ、遺影は故人のスピード証明写真を厚紙にテープで貼り付けたもの、香炉は浅草の雑貨屋で買ったという六八〇円の安い部類のものであった。例によって百円ショップで買った新聞ストッカーをひっくり返したものを台にしていた。

「明日はね。千代子の好きだったものを仏壇に供えようと思ってるの。たばこはフィリップモリスの五ミリ。酒はカップ酒。二百円くらいのやつ。おれは酒やらないからね。これでいいや。おまんじゅうをバラ売りのやつ二個くらい。花をあいつの好きだった紫の花瓶に飾ろう。外で採ったやつじゃなくてちゃんと買ったやつね。でも最近は花が高えんだよなあ」

私と謙一郎はせんべい布団の上に座って「仏壇」の遺影を眺めた。ショートヘアにベージュのニット地のベレー帽を被っている。眉は細くきちんと引かれていて力強い雰囲気を与える。口紅の赤色は明るく若作りのきらいはあるが、印象は悪くない。全体的に洗練されたファッションと気の強さがにじみ出る面持ちは、この人の職業はデザイナーだった、と説明されるとしつくり来る。聞けば生前は長年ブティックの店員をしていたという。謙一郎と出会う前の住所も原宿の竹下通り近くにあった。

スピード写真で撮られた個人の顔には緊張感が走っている。証明写真だから当たり前なのだが笑みはない。最も遺影に不向きな写真だ。それでも、謙一郎はそれを満足げに眺めながら、相変わらずせんべい布団の上で微笑んでいる。

「明日は何時に来る？」別れ際に謙一郎が私に聞いた。

「六時に授業が終わるんで六時半くらいになります」

「四十九日の後なんだけどさ。何か食べに行こう。おれごちそうするからさ」

「マックですか」私は冗談めかして言った。

「いやいや、マックじゃないよ。もっとおいしいところ」謙一郎は笑った。明日六月一日は生活保護費の受給日だった。

アパートの階段を下りると、先ほどの白黒のまだらの猫が暗がりから私たちの前に飛び出した。猫は私がいることに気づくと、おののいて逃げようとした。謙一郎が私の前に進み出て、猫に呼びかけた。

「怖がるな、怖がるな。おれの知ってる人だから。まんま食べたか？ まんま」

まだら猫は無言で謙一郎の脚の周りぐるぐる回る。たちまち彼のズボンが毛だらけになった。私は手を伸ばしてまだら猫を撫でようとする。が、やっぱり逃げられた。謙一郎が

去っていく猫の短い尾っぽに向って言った。

「おい走るなよ、お前。車に轢かれるぞ」

（六月一日 夕）

夕刻、謙一郎のアパートに着いた。アパートの階段わきには白黒のまだら猫と、もう一匹、茶褐色の猫がたむろしていた。相変わらず警戒の目でこちらを見ていたが、今日は私がそばを通っても逃げなかった。二階に上がると、謙一郎の部屋のドアが開け放たれていて、中から話し声が聞こえる。部屋には先客がいた。大きめのグレーのハンチングに茶色がかった色つき眼鏡をかけている細身の男性だ。首にタオルを巻いて、ブルーのTシャツに白の短パン、脚には黒のタイツを履いている。今からでもランニングをするような格好だ。どことなくアンパンマンの作者、やなせたかしに似ていた。

はまひろなり

濱弘也（四六）は謙一郎の部屋の窓の向かいに住んでいる。謙一郎とは以前からの知り

合いだった。濱弘也自身も生活保護を受給しており、普段は深夜の六本木で、終電を逃した酔客のためにトランペットを吹いて日銭を稼いでいる。数年前まで代々木公園で野宿生活をしていた。今は教会の牧師が主導する炊き出しボランティアに参加したり、貧困が原因で社会から隔絶された人々のためのシェルターを運営したりしている。私のほかに千代子の四十九日に来たのは彼だけだった。

「千代子さんは穏やかそうな人でしたね。稲葉さんとよく二人で散歩しているのを見かけましたよ。どこから見ても仲の良い夫婦でした」彼はそう語る。それだけに千代子の遺骨の行先が未だに謙一郎に知らされていないことには納得できない。

「いくらなんでも長すぎますよ。四十九日になっても千代子さんのお骨がどうなったかわからないっていうのは。事件性がないのは明らかじゃないですか。稲葉さんと千代子さんは事実婚です。役所や警察が法律に従ってしか行動できないのはわかります。それにしても人情というものがない」

「福祉の万木さんはいろいろやってくれていると思うんだけどね」と謙一郎。

「役所は縦割りですからね。個人でがんばっても限界があるのかもしれない。向こうも稲葉さんと千代子さんみたいなケースは初めてでどうしたらいいのかわからないんですよ。もしかすると稲葉さんが何も要求しないから向こうでは都合のいいように解釈して、千代子さん無縁仏として扱おうとしているのかもしれない。やはりここは新宿区役所に直接出向いて千代子さんの件について問い合わせてみた方がいいと思います」

「おれは読み書きもできないしバカだからなあ。それでも昔は氣勢を張って怒鳴りつける元気があったけどね。今はね、そんな元気はないよ」

「いやいや。今のところは怒鳴りつけるというよりは問い合わせに行くだけです。そのときはわたくしもお手伝いますから」濱弘也が言った。

謙一郎はしばらく沈黙した。ずっとうつむいたままだ。

「もちろん。謙一郎さんがどうしたいかですが・・・」

濱弘也は言葉を付け加えた。老人はうつむいたまま、誰に話すともなく、とつとつと語った。

「千代子と別れるときね。警察がおれにこう言うんだよ『もう二度と会えないからよく顔を拝んでおきなさい』って。この部屋にも警察が来て写真を撮っていった。亡くなった日の次の日にも刑事が一人来たよ。『千代子さんはちゃんとご飯食べてましたか』って聞いてきた。あいつ、最期は水も飲めなかったのにな」

謙一郎は「仏壇」の遺影に目を向けた。おちよこの脇に水が満たされたコップが供えてあった。濱弘也と私は、ただ遺影を見つめるだけで次に続く言葉を発せられずにいた。

「泣かないでよ。お願いだから」

沈黙を破って謙一郎が私の肩を後ろから叩いた。弱弱しくて頼りないが、温もりのある手だった。そして「濱さん、おれが役所に行くときは、一緒に来てください。お願いします」と言う謙一郎は膝について濱弘也に頭を下げた。

「そのときは僕も一緒に行かせてください」と私はかろうじて声にできた。

「ありがとう、ありがとう、ありがとう」と謙一郎が濱弘也と私に何度も何度も頭を下げた。



謙一郎と濱弘也がたばこをふかしている。謙一郎は「メビウス」、濱弘也は「わかば」を吸っていた。たばこを吸わない私は、所在なげだったので線香をつけようとした。「仏壇」には「フィリップモリス」の五ミリが供えてあった。マッチで線香に火をつけると、強い梅の花の香りがほのかに漂った。タールの強い「わかば」の独特なおいが多少は和らいだ気がする。開け放たれたドアからは、夕刻になってエサを求める猫たちの鳴き声が入ってきた。

私はせんべい布団の上で手を合わせ「仏壇」に向って拝んだ。目をつむると、ある光景を思い出した。以前、私がいちごを持ってこの四畳半を訪れたときの光景だ。そのときの謙一郎は震える手で私からパックのいちごを受け取ると、「仏壇」に供え、布団の上にひざまずいた。そして顔の前で手を合わせ、何度も何度も額を布団に押し付けて、こう言うのだった。「千代子、千代子。いい友達ができたんだ。謙はがんばる、がんばるからな。見守っててくれよ」

遺影に向かって拝んだ後、私は目を開けて後ろを振り返った。濱弘也と稲葉謙一郎がいた。

「ねえ、見て見て。今日は千代子が笑ってるよ」

「仏壇」の遺影を指差して謙一郎が言った。